

研究テーマ：家庭での効果的な学習方法を指導するにはどうすればよいか

所属 高知県立高知追手前高等学校
氏名 永野 浩史
RG SH7

1. 研究の背景

リサーチ対象とするクラスは、私がホーム主任を担当している1年1H（人文・語学コース）で、ほぼ全員が国公立大学への進学を目指しており、授業にも熱心に取り組む。生徒間の仲も良く、ペアやグループでの活動も活発に行うが、基礎的な語彙や文法知識が不足している生徒が存在し、授業中の活動に支障をきたすこともあった。

進路環境研究によると、1年生で学力が伸びた生徒には「予習→授業→復習」のサイクルを定着させ、1日3時間以上学習し、英語は特に予習に力点を置く、という特徴がある。

2. リサーチ・クエスチョン

大学入試に対応できる学力をつけるために、最低1日1時間は家庭で英語を学習する習慣を確立させるにはどうすればよいか。

3. 予備調査（4月末）

①家庭学習時間調査：クラス平均で**29**分しか家庭で英語学習を行っていない。

②家庭学習実態調査：「試験前以外は宿題しかしない」生徒(**26.8%**)と「普段は何もせず、試験前の学習のみ行う」生徒(**19.5%**)を合わせるとクラスのほぼ半数になる。

③授業観察：宿題を解説する際に発言を求めると、「わかりません」と言って黙ってしまう生徒や、安易に周囲に助言を求める生徒が存在する。

4. 仮説の設定

家庭での学習方法のモデルを提示し、モデル通りの予習を前提とした授業を展開すれば、家庭学習が習慣化するのではないか。

5. 計画の実践

4～5月を高校での英語学習の土台作りの期間として、主に家庭学習に不可欠な辞書を活用するための指導を行った後、教科書導入の時期に合わせて「家庭での学習方法」を文書にして全員に配布し、「予習→授業→復習」というサイクルの確立を図った。

また、授業では音声モデルを提示する前に生徒に音読を求めたり、既習内容に関するクイズを毎時間実施することにより、家庭で学習せざるを得ない状況を作った。

6. 実践の結果

6月前半の**10**日間に再度学習時間を調査したところ、クラスの平均学習時間は**56**分となり、ほぼ倍増した。

7. 結果の検証

生徒からは「授業がわかりやすい」「自分のわからないところが授業で解決できる」という声があり、家庭学習の重要性が理解できたようだ。

しかし、授業では、内容理解に関する活動と、聞き取りや音読に関する活動では、進度に大きな開きが生じ、家庭学習が教科書本文の内容読解に偏ってしまい、音声面の学習が疎かになっている現状が浮き彫りになった。学習量だけでなく、質も高める指導が必要となることが明らかになった。

8. 新リサーチ・クエスチョン

学力に応じた効果的な家庭学習を行うにはどうすればよいか。

9. 新仮説の設定

学習者が、自らの弱点を把握し、独自の学習計画を立てることができれば、学習の質を高めることができる。

10. 計画の実践

学習の質を高めるためには、前記の「予習→授業→復習」というサイクルに加え、「テスト→検証（弱点把握）→課題（弱点克服）」というサイクルの確立も必要になる。本校では行事計画の中に毎月、定期考査・課題テスト・校内実力テスト・全国模試のいずれかが組み込まれており、このテストと家庭学習を効果的に関連付けることが可能である。テスト返却の際には弱点に関するコメントを与えることを心掛け、返却後には間違えた問題を訂正し、ポイントをまとめるためのノート作成と今後の課題設定を義務付けた。

11. 結果の検証

クラスのほとんどの生徒が国公立大学への進学を目指している以上、結果の検証には全国的な視野に立っての現状把握が必要になる。そこで、7月と11月に実施した全国模試を基に、9月前半に10日間調査した家庭学習時間を関連付けて、結果を検証した。

平均家庭学習時間は、調査を行った時期が文化祭・体育祭の準備期間中であったことが影響し、39分に減少してしまっただ。しかし、全国模試に関しては、クラスの平均点偏差値が「56.2」から「56.7」に0.5ではあるが上昇した。下記の表を見ると、学力伸張と学習時間が必ずしも比例しておらず、学力の伸長のためには学習時間の確保に加えて、現状を把握した上で弱点を確実に克服していくことが必要になることが明らかとなった。

<全国模試における学力推移と家庭学習時間の相関関係>

		11月全国模試			
		A層	B層	C層	D層
7月 全国 模試	A層（偏差値 68 以上）	39分	21分		
	B層（偏差値 58 以上 68 未満）	8分	41分	33分	
	C層（偏差値 48 以上 58 未満）		37分	45分	26分
	D層（偏差値 48 未満）			54分	37分

12. 成果と今後の課題

D層に属する者から「弱点は把握できているが、毎日の予習や宿題に追われて、弱点を克服するための時間がない」という声があった。その生徒と話を進めると、復習の時間がなく、既習事項の定着がないままに、新出事項の学習が行われていた。結局、学習計画は学習時間の計画だけで、学習内容の計画ではなかったことがわかった。

逆に、成績上昇者からは「努力したことが成績につながってうれしい」「最初は辛かったけれど、なんとなくだが、今何をしなければいけないか、言い換えると勉強の要領がわかった気がする」「今学習していることが、前に学習したこととつながるようになった」という声があった。自立した学習者としてのスタートが切れつつある。

今後も、生徒と共に現状を個々に分析し、より一層綿密な学習計画を個別に立てることが必要になる。そのために、結果を見ただけで現状分析が可能となるようなテストの作成と、生徒の学習サイクルに合った授業改善ができるかどうか、課題となる。